



敬愛しながら反発し、反発しながら敬愛する：  
中島敦「弟子」論

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学国語国文学会・札幌 公開日: 2025-11-25 キーワード: 作成者: 山内, 麗 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/0002000677">https://doi.org/10.32150/0002000677</a>

## 敬愛しながら反発し、反発しながら敬愛する

——中島敦「弟子」論——

山内 麗

### はじめに

中島敦「弟子」は、『論語』や『孔子家語』などの漢籍を原典として、儒家の祖である孔子とその弟子の子路を描いた中編小説である。作者の死から二ヶ月後の一九四三年二月に、『中央公論』（第五八巻第二号、中央公論社）に掲載された<sup>(1)</sup>。

子路は孔子の「人間の厚み」に圧倒されて彼の弟子になった。子路は均衡のとれた豊かさを持つ孔子に心酔した。しかし、主君の愚行を諫めて処刑された泄治<sup>せぢや</sup>の死を孔子が無駄死にと評したときなどに、子路は保身を最優先するような師の考えに不満を感じていた。仕官先を探す師に従って放浪するうちに、子路は不遇の中でも道を実践し続けるといふ「使命」に目覚め、孔子およびそれに従う自分たちの「運命」の意味がわかりかけてきた。師の推薦により衛の孔家に仕えた子路は、政変の中で主君を救おうとして戦死し、それを知った孔子は深く悲しんだ。以上が「弟子」のあらすじである。

本稿の目的は、これまでとは異なる「運命」が描かれた「弟子」が中島文学においてどのような意味を持つのかを論じることである。

中島敦の作品は、「運命」というテーマに注目されてきた。高橋英夫「中島敦論——運命と人間——」（『海』第一巻第六号、一九六九年一月、中央公論社）は、「中島敦の文学は人間が決して予知しえない運命との出逢いを、はじめは怖れ、狐疑しながら、最後にはこの不可解な現実を人間の側から追いつめていって、それを信ずるに至った人間意志の文学であり、人間検証の文学であった」と考察している。勝又浩「作品と鑑賞——『山月記』鑑賞——」（同著『Spirit 中島敦作家と作品』）一九八四年七月、有精堂）は、「山月記」「文字禍」「狐憑」「木乃伊」からなる「古譚」四編<sup>(2)</sup>について「みな狂か死かの物語だというのは、やはりかなり奇異である。このことだけに限ってみても、中島敦という作家がいかに人間の運命という問題に憑かれていた人であったかがわかる」と述べている。中島敦は複数の作品で描くほど「運命」にこだわっていたと捉えているのである。

「弟子」にも「運命」に関する描写がある。善人が報われないことに疑問を抱いていた子路は、孔子の不遇にも同じ疑問を抱き、そのような「運命」を作り上げる「天」に不満を感じていた。だが、師と共に遍歴の日々を送る中でその不満は薄れていった。孔子および彼に従う自分たちの不遇を「運命」として受け入れ、「一小国に限定されない・一時代に限られない・天下万代の木鐸」としての「使命」に目覚めたのである。この目覚めは、乱れた世でも最善を尽くして生きようとする師の姿を間近で見続けたことからそのものであるため、二人の関係を語らずして子路の「運命」への認識を読み解くことはできないだろうと論者は考える。

子路の「死に至る迄<sup>かむ</sup>」なかつた・極端に求むる所の無い・純粹な敬愛の情だけが、此の男を師の傍に引留めた」。その一方で、「教を受けること四十年に近くして、尚、此の溝はどうしようもない」と語られるように、師弟間には考え方の相違があつた。子路は師の形式主義的な教えは受け入れない。主君を諫めて殺された泄治への評価が分かれた際に師弟間で考えが食い違う場面もある。孔子は泄治の死を無駄死にと評したが、子路は一身の安全よりも身を捨てて義をなすことの方が大切だと考え、師の明哲保身主義に不満を覚える。

勝ち目がないことを予感しつつも義をなすことを選んだ子路の死に方は、孔子が泄治の諫死を認めなかつたことを鑑みると師の意に反するものに見える。

子路は二人を相手に激しく斬り結ぶ。往年の勇者子路も、しかし、年には勝てぬ。次第に疲労が加はり、呼吸が乱れる。子路の旗色の悪いのを見た群集は、此の時漸く旗幟を明らかにした。罵声が子路に向つて飛び、無数の石や棒が子路の身体に当たつた。敵の戟の尖端が頬を掠めた。纓（冠の紐）が断れて、冠が落ちかかる。左手でそれを支へようとした途端に、もう一人の敵の剣が肩先に喰ひ込む。血が迸り、子路は倒れ、冠が落ちる。倒れながら、子路は手を伸ばして冠を拾ひ、正しく頭に着けて素速く纓を結んだ。敵の刃の下で、真赤に血を浴びた子路が、最期の力を絞つて絶叫する。

「見よ！ 君子は、冠を、正しうして、死ぬものぞぞ！」（十六）四八一・四八二頁）

冠を正す行為は、子路が疑問視していた形式主義的な行動であるように見える。先行研究において、子路の死の場面、特に冠を正す行為については議論が重ねられている。木村一信「『弟子』論——「己が性情」への指向——」（同著『中島敦論』一九八六年二月、双文社）は、冠を正す行為は孔子の教えを守ろうとした結果であるとする立場から、「冠を正しうして」という言葉は「尋常な弟子として生きたい」心情の表れであると捉えた。松村良「中島敦『弟子』論——師弟愛について——」（『学習院大学国語国文学会誌』第五一号、二〇〇八年三月、学習院大学文学部国語国文学会）は、子路の死は孔子の思想に反したものであるとする立場から、泄治の死について孔子に再び問いかけるという意図をその死に見出した。子路は孔子の教えを守って死んだのか、孔子の思想に背いて死んだのか。子路の死の場面の解釈は揺れている。本稿もこの場面に注目し、弟子として生きた子路の孔子に対する最終的な立ち位置を読み解きたい。弟子の死という形で訪れた師弟の結末は、師と共に生き「使命」に目覚めた子路の「運命」への態度の発露であると論者は考える。

「弟子」以前のの中島作品は、周囲に生き方を左右される受動的な主人公を描いたものが目立つ。それに鑑みれば子路は、自らの意志に従って生きる能動的な人物であり、本作はその特異性が注目されてきたと整理することもできる。その特異な人物像は、「運命」との関わり方にも表れている。郭玲玲「中島敦『弟子』論——己を堅持する子路像の成立をめぐって——」（『東アジア研究』第一三三号、二〇一五年三月、山口大学大学院東アジア研究科）が「『弟子』をはじめ、南洋から帰国した後に創作した作品を概観すると、主人公たちには顕著な変化が見られる。それは自分の運命に対して能動的に参与する意欲が起こり、己の存在に対して肯定できる新たな

側面である」と指摘しているように、子路は「運命」に流されるばかりではなく、「運命」についての思考を続け、自らの意志を持って生きる。郭はこのような子路像を「中島文学における新たな展開の一つ」であると考察した。

そのような子路が「運命」とどのように向き合ったのかに言及している先行研究もある。先の勝又浩「中島敦 代表作解題——『弟子』——」(同著『Spirit 中島敦 作家と作品』前掲)は、子路と孔子の「二つの大きな個性が相依って、更に大きな社会と、運命と闘っている」と述べ、藤村猛「中島敦論ノート(六)」(『国語国文論集』第二三三号、一九九三年一月、安田女子大学日本文学会)は、「弟子」を「主人公達が己の運命と対抗する『生死のドラマ』」であると捉えている。勝又も藤村も、子路は「運命」に反抗していたと考えているが、果たしてそうだろうか。師にさえ譲ることのできない自我に従って生きる子路の人物像からか、「運命」への不満については議論が重ねられても、「運命の意味が判りかけて来た」場面は十分に注目されていないように思われる。「弟子」以前の主人公の多くが「運命」に自分の意志を圧倒されて苦しみを味わうのに対し、子路は不遇という「運命」を受け入れ、その中で自分の意志を貫く「使命」に目覚める。本稿は、この転換を生じさせたと考えられる執筆背景にも目を向けていく。

中島は、南洋庁内務部地方課国語編修書記としてパラオ島コロールの南洋庁に赴任するため、一九四一年六月二十八日に日本を出国した。翌一九四二年の三月一七日に出張の名目で帰京し、そのまま南洋庁に辞表を提出した。「弟子」の脱稿は帰京後の同年六月二四日である。

中島が帰京した一九四二年、日本は戦争の色が濃厚となっていた。四月一八日に東京、名古屋、大阪などの主要都市が初めて空襲に見舞われたこ

とや、六月五日に始まったミッドウェー海戦で日本海軍が大敗北を喫したことからは、時局の悪化が窺い知れる。このような情勢は文学にまで波及した。同年五月二六日には日本文学報告会が設立され、作家たちは国のために創作することを求められるようになった<sup>(3)</sup>。

このような時代に、中島は戦争と文学との関係に言及した随筆「章魚木の下で」を遺した。中島の死後の一九四三年一月に『新創作』新年号(第五巻第一号、豊国社)に掲載されたものであり、脱稿は前年の一月二五日頃とされている。そこには、「南洋呆け」ゆえに戦争と文学とを全くの別物と見做していた中島が帰京後の文壇の状況を見たときの驚きが記されている。この随筆において、中島は「文学を高い所に置いてあるが故に、此の世界に於ける代用品の存在を許したくない」ことを理由に、戦況下で作品が「出来なければ出来ないで、ほんもの出来る迄待つほかは無い」(傍点原文、以下同)という考えを述べている。加えて、中島自身が思う戦時下での文学の意味も次のように記されている。

文学が其の効用を發揮するとすれば、それは、斯ういふ時世に免れずれば見のがされ勝ちな我々の精神の外剛内柔性——或ひは、気負ひ立つた外面の下に隠された思考忌避性といったやうなものへの・一種の防腐剤としてであらうと思はれるが、之もまだハツキリ言ひ切る勇氣はない。(二三頁)

中島は、「南洋呆け」という自嘲の体を取りながら無理に戦意高揚の意図を持たせた文学を暗に否定し、流されるように戦争に向かう人々の目を覚まさせることに文学の意味を見出している。南洋行後の作品である「弟子」

は、作者のこのような意識のもとで執筆された作品であるといえる。論を展開するうえで、主人公の意志と「運命」をめぐる本作が戦時下に生み出されたものだということも勘案する。

まず第一章では、「弟子」との比較対象として中島作品から「山月記」と「牛人」を取り上げ、その「運命」を分析する。第二章では、語り手の視点に注目し、「弟子」の語りの手法を考察する。第三章では、語り手が特別な視点を持たせた子貢に焦点を当て、その存在の意義を明らかにする。第四章では、子路と孔子の溝の根源を分析するとともに、子路の「運命」に対する感情を追う。最後に第五章では、それまでの分析を踏まえて子路が冠を正した意味を考察し、敬愛と反発を抱え続けた彼の到達点を示す。

## 1 中島文学における「運命」

「弟子」における「運命」について論述し、中島文学の中で本作の持つ意味を明らかにするためには、中島敦の他作品と比較する必要がある。本章ではそれ以前の作品における「運命」について、その内実と人間への作用を分析する。それにあたり、「運命」についての議論が重ねられてきた「古譚」四編および「古俗」(4)二編の中から、作中で主人公の人生が「運命」という言葉を用いつつ物語られている「山月記」と「牛人」を選出した。

中島敦「山月記」は、唐代伝奇小説である李景亮撰の「人虎伝」を原典として、虎と化した李徴が友の袁慘と再会する一晚の出来事を描いた短編小説である。一九四二年二月に『文學界』(第九卷第二号、文藝春秋社)に掲載された。

李徴は詩人としての名が上がらずに困窮し、己の詩業に半ば絶望した。自尊心を傷つけられた彼は発狂し、姿を消す。翌年、監察御史の袁慘は虎

に襲われかけた。この虎の正体が友の李徴であった。李徴は袁慘に理由もわからずに虎になったことを語るとともに、詩の伝録を頼んだ。その後、彼は臆病な自尊心と尊大な羞恥心のために虎になったのだと告げる。別れ際、李徴は袁慘に妻子の世話を託し、妻子のことよりも詩業のことを先に頼むような男だから獣に身を墮とすのだと自嘲した。以上が「山月記」のあらすじである。

袁慘と再会した李徴は、「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」と語る。李徴は自身が虎になったことを不可解な「運命」と捉えているのである。さらに、即席の詩の中で李徴は「偶因狂疾成殊類」と述べており、勝又浩「語注」(高橋英夫・勝又浩・鷲只雄・川村湊編『中島敦全集』第一巻、二〇〇一年一〇月、筑摩書房)によると、この部分は「思いがけず狂気に見まれて獣となってしまう」と現代語訳される。李徴にとって、自身が虎になってしまったのは理由のわからない偶然の結果なのだ。

ところが、即席の詩を書き取らせた後、李徴は「何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思ひ当ることが全然ないでもない」と先刻の言葉を覆す。

己は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざること  
を惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうともせず、又、己の珠なるべき  
を半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。己

は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙<sup>ぞん</sup>志とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。(二七頁)

李徴は自身の性情である「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」にふさわしい姿が虎なのだと言ふ。虎になつてしまつたのは不可解な偶然の結果であるとしていた李徴だが、ここでは虎になつた理由を己自身の内面から探つている。李徴はその後、再び考えを覆す。「本当は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら。飢ゑ凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけてゐる様な男だから、こんな獣に身を墮すのだ」と、今度は自身の人間性の欠如を虎になつた理由として見出すのである。

「人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ」と語る李徴は、自身の性情である虎を制御できなかったために虎の姿になつてしまつたのだと考えている。虎に変身する前から虎は李徴の一部だつたというわけである。その後で「本当は、先づ、此の事の方を先にお願ひすべきだつたのだ、己が人間だつたなら」と語る李徴は、人間を名乗るのもおこがましい、獣のような本性の持ち主だから自分はそれにふさわしい虎の姿になつたのだと考えている。つまり、自分の本質は端から人間などではなく虎だつたのだと捉えているのである。人間である自分が偶然虎になつた、

自分の一部であつた虎が肥大化したため姿も虎になつた、自分は本来の姿である虎になつたというように、李徴は虎になつた理由について語れば語るほどに本来の自己を虎と見做すようになっていく。虎の姿になつたことをきつかけに、李徴は「自分は虎である」という認識を生成していったのだ。人間の心を保てる時間が次第に短くなり、「今迄は、どうして虎などになつたかと怪しんでゐたのに、此の間ひよいと気が付いて見たら、己はどうして以前、人間だつたのかと考へてゐた」と李徴が述べていることと紐づけて考えると、李徴は人間の心を失つていくと同時に、自分が虎であるという認識を徐々に強化していくと捉えられる。虎になるなどという不可解としか思えない「運命」によつて、李徴の自認は人間から虎に移り変わった。「運命」は李徴の姿を変えただけでなく、認識にも影響を及ぼしたのである。

「山月記」における「運命」は、不可解なものであるにも拘わらず李徴本人によつて理由を見出されている。それは「運命」に對峙することを契機として人間の意識に揺さ振りが生じるからである。人間である李徴は「運命」に強制的に順応させられているのである。

中島敦「牛人」は、『春秋左氏伝』を原典として、主人公である叔孫豹<sup>しゅくそんひょう</sup>が夢の中で自分を助けた人物によく似た庶子の豎牛<sup>じゅぎゅう</sup>を信任したにも拘わらず、裏切られて死に至るまでを描いた短編小説である。一九四二年七月に『政界往来』(第一三巻第七号、政界往来社)に掲載された。

叔孫豹は乱を避けて逃げる道中で美婦と一夜を共にした。その後、彼は別の女を娶り二児をもうけた。ある夜、彼は下降する天井に押し潰されそうになっているところを牛のような男に助けられる夢を見る。数年後、かつて契つた女が、夢の中で己を助けた牛男にそっくりな息子を連れて訪ね

て来た。豎牛と呼ばれるようになったその庶子を叔孫豹は厚く信任したのだが、豎牛は叔孫豹の息子たちを密かに陥れていた。叔孫豹がその事実にあつたときには豎牛に抗う術はなくなっており、彼は豎牛に飢えさせられた。叔孫豹は再び天井が下降する夢を見たが、牛男は今度は救いを求めても手を伸べてくれなかった。その三日後に、叔孫豹は飢えて死んだ。以上が「牛人」のあらすじである。

叔孫豹が「運命的な畏怖感」に圧倒されて自身の死を受け入れざるを得なくなる直前に見たのが、天井に圧迫されるも牛男の助けを得られない夢であることから、夢の中の下降する天井は現実の叔孫豹の死に関わっていると考えられる。加えて、叔孫豹が天井に押し潰されるか否かが牛男の行動に左右される描写は、叔孫豹の生死が夢の中の牛男に握られていることを暗示している。「見える筈はないのに、天井の上を真黒な天が磐石の重さで押しつけてゐるのが、はつきり判る」とあり、叔孫豹に迫る死そのものである天井を押しつける「天」および生死を左右する牛男は、人間を超越した神の如きものである。

牛男からの助けを得られない夢から覚めた叔孫豹は、今度は豎牛と対面する。

傍を見上げると、これ又夢の中とそつくりな豎牛の顔が、人間離れのした冷酷さを湛へて、静かに見下してゐる。其の貌は最早人間ではなく、真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物のやうに思はれる。叔孫は骨の髄まで凍る思ひがした。己を殺さうとする一人の男に対する恐怖ではない。寧ろ、世界のきびしい悪意といった様なものへの、遜つた懼れに近い。最早先刻迄の怒は運命的な畏怖感に圧倒されて了つ

た。今は此の男に刃向はうとする気力も失せたのである。(二七四頁)

叔孫豹は豎牛の顔を「一個の物」のように感じ、その奥に「真黒な原始の混沌」を見た。従順な豎牛には、息子たちを陥れて叔孫豹を苦しめ、終には叔孫豹本人を死に追いやってしまう裏の顔があつた。豎牛を信任していた叔孫豹にとつてはわけがわからない。「わからない」ということそのものが豎牛の本質なのであり、それが「真黒な原始の混沌」と表現されているのである。叔孫豹には豎牛の顔が「一個の物」のように見えた。「人間離れのした」豎牛の顔からはどんな感情も読み取ることができないことを「物」に喩えて表しているのだろう。「原始の混沌」という表現からもわかるように、豎牛の顔は叔孫豹にとつて遠く理解の及ばないものを感じられたのである。理解できないものには太刀打ちできない。「真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物」のように理解不能な顔のために、叔孫豹の豎牛への怒りは「運命的な畏怖感に圧倒され」たのだ。

「牛人」は、登場人物たちの意志とは関係のない事柄がきっかけとなり、物語が展開していく。物語の冒頭で叔孫豹が斉に逃げ込んだのは、叔孫豹の意志とは関係なく乱が起きたからであり、その先で美婦と出会ったのも偶然である。数年後に魯に戻ったのも、きっかけは政変であり叔孫豹の意志とは無関係の出来事である。叔孫豹が殺される理由が描かれていないことから、「運命」には理由などなく彼の死さえも彼の意志とは無関係に見える。作者が『春秋左氏伝』で描かれている叔孫豹の人物や豎牛の野心を削ぎ落とし、叔孫豹が豎牛に殺される理由を読み取ることが困難にすることで物語の展開を不可解なものにした<sup>①</sup>のは、「運命」の不可解さを描くためだと論者は考える。「牛人」は「運命」の理由が叔孫豹自身にあるとする

ような因果応報の物語ではない。「運命」は意志を持たずに理由なく働き、結果的に叔孫豹が苦しめられているのである。「牛人」は、本人の意志ではどうすることもできない「運命」を描いた物語である。「運命」は叔孫豹の意志の及ばないところで動いているのだ。

「牛人」で描かれる「運命」は、「真黒な原始の混沌に根を生やした一個の物」のように不可解で、逃れられないものである。「運命」はそれ自体が意志を持たず、それがもたらされる本人の意志も通じないため、人間はただ「運命」を甘受することしかできない。

「山月記」と「牛人」の二作品における「運命」は不可解なものであり、それは前述の高橋の考察と重なる。だがしかし、中島敦の文学は「運命」を信ずるに至った「人間意志の文学」であるとの高橋の考察に対して論者は懐疑的である。「山月記」と「牛人」において、果たして人間意志は物語を展開させるほどの力を持ち得ていただろうか。李徴が「運命」によって認識を変化させられ、叔孫豹が「運命」に圧倒されて抗う氣力を失ったように、この二作品は「運命」を前にした人間の意志の無力さを描いていると論者は考える。「山月記」と「牛人」には、強制力を持つ「運命」とそれに翻弄される人間の関係性が浮かび上がっているのだ。では、「弟子」の主人公である子路は「運命」とどのように対峙したのであるか。ここから先は「弟子」本文の考察に移行する。

## 2 子路の一代記

主人公である子路の造型について考察する前に、まずは子路や孔子の人生を語る語り手について考察する。

「苦心の結果、誠に如何にも古代支那式な苦肉の策が採られた」の「古

代支那式」という表現や、「第一、何処かヴィタルな力の欠けてゐる所が氣に入らない」の「ヴィタル」という単語からは、語り手が物語世界よりも後の時代に位置し、近代的な価値観を内面化していることが察せられる。

さらに、「戦勝国たる筈の齊の君臣一同悉く顛へ上つたとある」の「とある」からは、語り手が典拠をもとにこの物語を語っていると推測することが可能である。とはいってもこの語り手は、典拠の記述を忠実に再現するつもりはないようだ。「後世に残された語録の字面などからは到底想像も出来ぬ・極めて説得的な弁舌を、孔子は有つてゐた」の一文からは、後世に残された記録からは窺い知れない要素を、語り手が独自の理解によって孔子に付加しようとしているさまが読み取れる。「兎に角、経書の字句をほじくつたり古札を習うたりするよりも、粗い現実の面と取組み合つて生きて行く方が、此の男の性に合つてゐるやうである」の「やうである」からもわかるように、語り手は典拠を読んだうえで子路や孔子を自分なりに解釈しようとして試みているのである。

「弟子」は、時系列に沿って進んでいく物語であり、子路の一代記のような形式を採っている。それなのに語り手は、孔子に師事して間もない頃の子路を語る中で「後年の孔子の長い放浪の艱苦を通じて、子路程欣然として従つた者は無い」と、その後の彼の生き方に言及したり、「ずつと後年になつて、或時突然、親の老いたことに氣が付き、己の幼かつた頃の両親の元氣な姿を思出したら、急に涙が出て来た。其の時以来、子路の親孝行は無類の猷身的なものとなるのだが、兎に角、それ迄の彼の俄か孝行は斯んな工合であつた」と、時系列に沿った語りの形式を逸脱して後年の出来事を先取りしたりもしている。つまり、語り手は子路や孔子の人生をその終わりまで把握したうえでこの物語を語っているのである。全て知ってい

るのだからエピソードをもっと作為的に配置することも可能であるはずなのに、孔子に師事してから死に至るまでの弟子としての子路の人生を、語り手はあえて時系列に沿って語ろうとしている。なぜそのように一代記風に語る必要があるのだろうか。先んじて述べれば、それは登場人物の変化を追うためである。

物語が進むにつれ、子路の考え方は変化していく。入門当初、彼にはどうしても受けつけない教えがあった。

単に勇を好むとか柔を嫌ふとかいふならば幾らでも類はあるが、此の弟子程もの形を軽蔑する男も珍しい。究極は精神に帰すると云ひで、礼なるものは凡て形から入らねばならぬのに、子路といふ男は、その形からはひつて行くといふ筋道を容易に受けつけないのである。「中略」形式主義への・此の本能的忌避と闘つて此の男に礼樂を教へるのは、孔子にとつても中々の難事であつた。が、それ以上に、之を習ふことが子路にとつての難事業であつた。（二二）四五二頁）

このように、入門当初の子路は形式主義を嫌っていた。けれども、そのような彼に変化が訪れる。師に言われるがまま「兎にも角にも形に就かうとし」て「俄か」の親孝行を始めた子路だが、親の老いに気づいて涙を流したとき以来、彼の親孝行は無類に献身的なものになった。子路にとつて親孝行は、当初は自分の納得できない形式主義の一つであつたが、その意味を理解したことで心から実践できる行為になったのである。

子路の変化を描いた場面は他にもある。孔子一行が暴徒に襲われて困窮する中、孔子だけは気力が衰えることなく、普段通りに弦歌していた。焦

つた子路が「夫子の歌ふは礼か」と尋ねると、孔子は「由よ。吾汝に告げん。君子樂を好むは驕るなきが為なり。小人樂を好むは懽るなきが為なり。それ誰の子ぞや。我を知らずして我に従ふ者は」と応えた。すると、子路は「其の心に思ひ到」って嬉しくなり、舞い始めた。先の引用中にあるように、礼とは「凡て形から入らねばならぬ」ものである。歌うのも礼なのかという子路の問いからは、この状況下での歌も形式主義的なものであると彼が捉え、意味を見出せずにいたことが窺える。それでも子路は、孔子の応答を聞き「其の心に思ひ到」つたことで自分も師に倣つた。

このように、孔子の門下に入った当初、子路は形式主義を受けつけない。しかし、物語の進展とともに、始めは理解できなかった形式主義的な行為の持つ意味に彼が気づく様子も描かれており、子路が形式主義的な行為であつても意味を見出せるものであれば進んで実行するようになったことが看取できる。語り手がこの物語を時系列に沿って語っているのは、登場人物の変化を追うためである。「弟子」の中心人物である子路と孔子はそれぞれに確固たる自己を持っており、流されやすい人物ではない。だからこそ、彼らの考えが変化するときにはそこに至る理由がある。語り手は、彼らに変化していく過程に焦点を当てているのである。

「弟子」は、近代的な価値観を持つ語り手が典拠の記述を超えて子路や孔子を捉え直し、変化していく彼らを子路の一代記として語る物語なのである。「己等の用ひられようとするのは己が為に非ずして天下の為、道の為なのだ本気で、——全く呆れたことに本気でさう考へてゐる」という一文にも表れているように、語り手は孔子一行を俯瞰的に評価しつつも、恥じらうことなく真つ直ぐに理想を掲げることが出来る彼らに一目置き、愛着をもって物語る。

## 3 師弟を見つめる子貢

「子供の時からの疑問なのだが」から始まる子路の「天」への不満など、語り手は子路の内言に迫りもする。このように踏み込んだ語りをするのは専ら子路についてであり、孔子の内言も語りはするものの、子路ほどには踏み込んでいない。そんな中、語り手がその考えにお墨付きを与え、読者の信頼に足る視点を持たせた登場人物がいる。それは子貢だ。

瑟の演奏をめぐる場面がある。孔子から奏者の心を映すような荒々しい演奏であるとの指摘を受けた子路が、深く考え抜いた末に「思ひ得たと信じて」再び演奏したところ、今度は孔子は何も言わなかった。その際に、次のような描写がある。

人の良い兄弟子の嬉しさうな笑顔を見て、若い子貢も微笑を禁じ得ない。聡明な子貢はちやんと知つてゐる。子路の奏する音が依然として殺伐な北声に満ちてゐることを。さうして、夫子がそれを咎め給はぬのは、瘦せ細る迄苦しんで考へ込んだ子路の一本気をあわれ 慙あわれまれたために過ぎないことを。（「四」四五六頁）

語り手は子貢を「聡明」であると評価し、彼が読み取ったことに「ちやんと」とお墨付きを与えている。語り手は子貢を通して子路と孔子の関係を相対化しているのである。

子貢は子路と孔子の違いをも浮き彫りにする。「ここに美玉あり。匱ひじに韞をめて蔵かくさんか。善賈ぜんかを求めて沽うらんか」という子貢の問いに、孔子は「之を沽らん哉。之を沽らん哉。我は賈あたいを待つものなり」と即座に前のめりな

応えを出す。子路は「必ずしも沽らうとは思はない」。子路と孔子の考えの違いが子貢の問いをきっかけに描かれている。

子貢は子路と孔子の違いだけでなく、肌は合わないが不思議と噛み合う二人の独特の関係性をも読者に読み取らせる。師から頻りに褒められることから子貢を含めた他の弟子たちに嫉妬心を向けられている顔回がんかいという若者があり、子路は「孔子から其の強靱な生活力と、又その政治性とを抜き去つた様」な彼をあまり好んでいなかった。あるとき、子貢は師を批評し、「顔回のやうな夫子と似通つた肌合の男にとつては、自分の感じるやうな不満は少しも感じられないに違ひない。夫子が屢々しばしば顔回を讃められるのも、結局は此の肌合のせみではないのか」と述べる。この言葉によつて、子路は師との関係の中にそれまで漠然と感じていたものを「肌合の相違」というのはっきりとした言葉で認識するに至つた。

さらに、子貢による美玉の問いおよび孔子批評と同じ第八章において、子貢による師への「奇妙な質問」も描かれる。「死後の知覚の有無」についての質問である。この質問に、「此の優れた弟子の関心の方向を換へよう」とした孔子は「死者知ると言はんとすれば、將に孝子順孫、生を妨げて以て死を送らんとすることを恐る。死者知るなしと言はんとすれば、將に不孝の子其の親を棄てて葬らざらんとすることを恐る」と「妙な返辞」をした。「飽く迄現実主義者、日常生活中心主義者」である師に対して尋ねるには適さないため「奇妙な質問」なのであり、質問の返辞としては「見当違ひ」であるため「妙な返辞」なのである。子貢は師のこの返辞に不満を抱いた。その後、子貢からこの話を聞いて死そのものよりも師の死生観に興味を持った子路が死について尋ねてみたところ、孔子は今度は「未だ生を知らず。いづくんぞ死を知らん」と応えた。この応えに子路は感心し

たが、子貢は「又しても鮮やかに肩透しを喰ったやうな気がした」。孔子は死について知らないと言っており、それは先の「妙な返辞」とは違う、自分の考えの形を取った素朴な応答である。子貢に質問されたときには彼の関心の方向を心配して自身で考えさせようとするような教育的意図を滲ませた返辞をした孔子だが、子路に同じ質問をされたときには彼の関心について心配することはなく、率直な返辞をしたのである。孔子にとって子路は、進む方向に関しては心配無用な一人前の人間であり、他の弟子に対するよりも師としての立場に縛られずに話せる相手だったのである。このように、子路と孔子の「肌合の相違」と、教えを授ける者と受ける者の立場にありながらその枠に収まらない風変わりな師弟関係の両方が、子貢の存在を通して語られている。

語り手からのお墨付きを与えられた視点を持つ子貢の存在は、子路と孔子の違いを対比させる。それと同時に、その違いを認識しながらも師と共にある弟子とその弟子に一目置く師の特異な関係性をも読者に読み取らせる。二人の関係は、前を歩く師を弟子が後ろから追いかけるようなものではない。子貢の視点は、敬愛する師の傍にありながらも反発を糧にして独自の道を行こうとする子路の姿と、一風変わった弟子を己とは別個の人間として尊重する孔子の姿を浮かび上がらせているのである。

#### 4 「道無き世」に交差する師弟

子路と孔子には独特の信頼関係があった。だが、二人の間に溝があったことも確かである。溝があることを自覚して反発しつつも師を敬愛し続ける子路の造型を意味づけるために、この師弟の溝がどこから生じるのかを考察する。

子路の入門当初は政治に関わることを避けていた孔子だが、魯で思いがけず用いられたことをきっかけに政治に頭角を現した。「自分の仕事の結果が直ぐにはつきりと現れて来る、しかも今迄の経験には無かつた程の大きい規模で現れて来ることは、子路の様な人間にとつて確かに愉快に違ひなかつた」と、子路も政治に喜びを見出す。「多年の抱負の実現に生々と忙しげな孔子の顔を見るのも、流石に嬉しい。孔子の目にも、弟子の一人としてではなく一個の実行力ある政治家としての子路の姿が頼もしいものに映つた」と、肌合いの異なる師弟はこのとき確かに認め合っていた。ところが、始めは順調だった孔子の初めての政治参与が、敵国に魯を危険視させるきっかけとなつてしまった。孔子の存在、あるいは孔子の施政によって充実していく魯の国力に恐れをなした敵国が、魯に美女の一人を送り込んだのである。彼女たちに魅惑された魯の有力者たちの姿に早々に見切りをつけた子路とは対照的に、孔子は粘り強く力を尽くそうとしたが受け入れられず、孔子の遍歴が始まることとなる。

善人が報われないことに対して子どもの頃から疑問を抱いていた子路は、孔子の不遇にも同じ疑問を抱く。

天は何を見てゐるのだ。其の様な運命を作り上げるのが天なら、自分は天に反抗しないではゐられない。天は人間と獣との間に区別を設けないと同じく、善と悪との間にも差別を立てないのか。正とか邪とかは畢竟人間の間だけの仮の取決に過ぎないのか？ 子路が此の問題で孔子の所へ聞きに行くと、何時も決つて、人間の幸福といふものの真の在り方に就いて説き聞かせられるだけだ。善をなすことの報は、では結局、善をなしたといふ満足の外には無いのか？ 師の前では一応

納得したやうな気になるのだが、さて退いて独りになつて考へて見ると、矢張どうしても釈然としない所が残る。そんな無理に解釈して見た揚句の幸福なんかでは承知出来ない。誰が見ても文句の無い・はつきりした形の善報が義人の上に来るのではなくては、どうしても面白くないのである。（七）四六二頁）

このように、子路は「運命」を作り上げる「天」という神のような存在に対して不満を抱いていた。没利害性を有し、「快感の一種の様なもの」が感じられるものを善きことと定める子路だが、善をなした者に「善をなしたといふ満足」の他にはつきりとした報いが無いことには納得しかねている。仕事の結果がはつきりと見える形で現れることを好んでいた子路は、善人への報いもはつきりとしたものを望んでいたのである。

魯の一件をきっかけに自分を用いてくれる国を求めて遍歴を始めた孔子だが、靈公を言いなりにした南子に侮辱された翌日に衛の国を去つたように、魯で尽くせる限りの手段を尽くそうとした昔日とは反対に、早々に国に見切りをつけるようになった。「諸侯は孔子の賢の名を好んで、其の美を欣ばぬ」、「実際の孔子は余りに彼等には大き過ぎるものやうに見えた」とあり、諸侯は孔子が「大き過ぎるもの」であるために孔子の美を喜ばず、孔子の政策を実行しない。このことは、龍を好んだ葉公子高が本物の大きな龍を見ると恐れて逃げ出した話に喩えられている。諸侯にとつての孔子は、葉公子高にとつての龍と同じように「大き過ぎる」のだ。その評判を好んでいても、間近にいられると浮世離れた偉大さに圧倒され、押し潰されるのではないかと恐怖を感じてしまうのである。「諸侯の敬遠と御用字者の嫉視と政治家連の排斥とが、孔子を待ち受けてゐたものの凡てである」

という叙述は、「大き過ぎる」孔子の与える恐怖が人々を乱し、その結果が良くない形で孔子に返つてきていることを示唆している。

孔子の変化の裏側で、子路にも変化が生じる。暴徒に襲われて困窮する中、「君子も窮することあるか？」と尋ねた子路に、孔子は「窮するとは道に窮するの謂に非ずや。今、丘、仁義の道を抱き乱世の患に遭ふ。何ぞ窮すとなさんや。もしそれ、食足らず体瘁るるを以て窮すとなさば、君子も固より窮す。但、小人は窮すればここに濫る」と応えた。子路は「窮するも命なることを知り、大難に臨んで些かの興奮の色も無い孔子の容を見ては、大勇なる哉と嘆ぜざるを得な」かった。善人が報われない「運命」に不満を抱いていた子路だが、「窮するも命なることを知り」、「窮する」という「運命」の中にあつても乱れずに生きる孔子の姿に、自分の「勇」が孔子のそれに比べてちつぽけに感じられたのである。

遍歴の中で孔子に感化されるとともに、子路は師以外の人物からも多大な気づきを得た。楽しみを全うして生きる一人の老人から次のように言われる場面がある。

陸に行くには車、水に行くには舟と昔から決つたもの。今陸に行くに舟を以てすれば、如何？ 今の世に周の古法を施さうとするのは、丁度陸に舟を行るが如きものと謂ふべし。猿狙に周公の服を着せれば、驚いて引裂き棄てるに決つてゐる。云々………子路を孔門の徒と知つての言葉であることは明らかだ。老人は又言ふ。「楽しみ全くして始めて志を得たといへる。志を得るとは軒冕の謂ではない。」と。（二十一）四七一頁）

老人は、孔子の思想は時代遅れだと指摘している。孔子とは正反対の生き方をしてこの老人との出会いは、子路に孔子を相対化する機会を与えた。子路は孔子の時代との相性の悪さを言葉で突きつけられたのである。「大き過ぎるもの」である孔子が用いられると国が乱れてしまうのも、この時代との相性の悪さによる。子路は老人に次のように返した。

「世と断つのは固より楽しからうが、人の人たる所以は楽しみを全うする所にあるのではない。区々たる一身を潔うせんとして大倫を紊（みだ）らぬは、人間の道ではない。我々として、今の世に道の行はれない事ぐつてある。しかし、道無き世なればこそ、危険を冒しても尚道を説く必要があるのではないか。」(十二・四七一・四七二頁)

孔子の時代との相性の悪さを受け止め、「道無き世」において道を説くことの必要性を主張した子路は、このとき、与えられた「運命」の中で信念を貫くことに意味を見出したのだ。「道無き世」がもたらす不遇こそが、孔子一行に与えられた「運命」である。

翌朝、老人と別れた子路は、孔子と老人とを並べて考える。明察も欲の無さでも老人に劣るはずのない孔子が己を全うする生き方を捨てて道のために天下を周遊していることを思うと、昨夜は一向に感じなかった憎悪を老人に対して覚え始めた。この心理描写について、秋元誠「中島敦「弟子」考——その劇的なるもの——」(『富山工業高等専門学校紀要』第二五巻、一九九一年三月、富山高等専門学校)は「老人に対する憎悪は「道の為」という観念の次元で生じており、生理的な感覚としてはむしろ老人に深く

共感している」と読解している。この指摘の通り、老人の生き方に「之も亦一つの美しき生き方には違ひないと、幾分の羨望をさへ感じないではなかつた」子路は、彼への共感を抱きながらも、道のために生きる孔子の崇高さとはかけ離れた存在であるといった観念的な理由で彼を憎悪した。だが、憎悪の理由はそれだけではないだろう。子路は老人との出会いによって孔子の偉大さを再確認するとともに、師とはかけ離れた生き方に憧れてしまったことに罪悪感を抱いた。「一旦事ある場合真先に夫子の為に生命を（なげう）抛つて顧みぬのは誰よりも自分だ」と深く信じていたからこそ、子路は己の不義な一面に戸惑い、「孔子の弟子」の顔をしていない自分を受け入れられない。知らない自分の存在をなかつたことにするために、魅力を感じていたはずの老人を子路は無意識のうちに憎悪したのだ。老人を憎悪すること自体が、子路が彼に惹かれたことの証なのである。

老人との出会いは、子路に師を相対化させるだけに留まらず、師と同化することのない自身の性質を自覚させもした。子路は不遇の中で信念を貫きつつ、楽しみを全うして生きる老人のように自分に正直に、意志のままに生きることを選んでいく。そのため、孔子が己の立場を理由に無駄だとわかり切った進言をしたなどと聞けば、意志よりも形を優先させるような師の行動に子路は顔を曇らせるようになり、師弟間の溝は深まっていく。異なる肌合いを持ち、政治を通して認め合つた子路と孔子は、それぞれの変化を経て、師弟間で考えが食い違う場面に遭遇することになる。それが泄治の諫死を論じる場面であることは既に述べた。孔子が初めて政治に関わつた魯では仕事の結果がはっきりと見える形で現れるのを喜んでいて子路が、ここでは「仮令結果はどうかあらうとも」と命を捨てて国を正そうとした泄治を評価した。さらに、「無駄とは知りつつも諫死した方が、国民

の気風に与へる影響から言つても遙かに意味があるのではないかと、諫めたい主君の心には影響を及ぼさないであろう彼の死に、国民の気風に影響を与え得るといふ意味を見出している。一方孔子は「古の士は国に道あれば忠を尽くして以て之を輔け、国に道無ければ身を退いて以て之を避け」として泄治の諫死を認めない。魯において子路がすぐに見切りをつけ、孔子が粘り強く国を正そうとした場面とは二人とも逆のことを主張している。子路には孔子の考えが国家よりも個人の出处進退を優先する明哲保身主義に感じられたのである。

遍歴の中で生じた子路の変化は孔子とのすれ違いを誘発するに留まらず、彼の「運命」への態度を変容へと誘いもした。

孔子の道を実行に移して呉れる諸侯が出て来ようとは、今更望めなかつたが、しかし、最早不思議に子路はいらだたない。世の溷濁と諸侯の無能と孔子の不遇とに対する憤懣焦躁を幾年か繰返した後、漸く此の頃になつて、漠然とながら、孔子およびそれに従ふ自分等の運命の意味が判りかけて来たやうである。それは、消極的に命なりと諦める気持とは大分遠い。同じく命なりと云ふにしても、「一小国に限定されない・一時代に限られない・天下万代の木鐸」としての使命に目覚めかけて来た・かなり積極的な命なりである。匡の地で暴民に囲まれた時昂然として孔子の言つた「天の未だ斯文を喪さざるや匡人それ予を如何せんや」が、今は子路にも実に良く解つて来た。如何なる場合にも絶望せず、決して現実を軽蔑せず、与へられた範囲で常に最善を尽くすといふ師の智慧の大きさも判るし、常に後世の人に見られてゐることを意識してゐる様な孔子の举措の意味も今にして始めて領

けるのである。(「十三」四七五・四七六頁)

子路は、孔子の道を実行する諸侯が現れない現実を「運命」として受け入れ、それでも道を実践し続けることが自分の「使命」であると考えてるようになった。孔子や子路を取り巻く不遇は何も変わらないが、そんな「運命」を作り出す「天」に不満を抱くことをやめ、その中で最善を尽くして生きることを決意したのである。閻瑜「中島敦文学における「天」——疑天から敬天へ——」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二一号、二〇一一年三月、大妻女子大学大学院文学研究科)は、「弟子」には「天は何を見てゐるのだ」と天の公平性に疑問を投げかける「疑天」が、その後の「季陵」には「天は矢張り見てゐたのだ」と天の公平性を「肅然」として懼れ「敬天」が描かれているとして、中島の「天」に対する認識の変化に論及した。確かに「弟子」には子路の「天」への疑問が描かれている。しかし、子路がその反抗心から解き放たれたことを見落としてはならない。子路の「天」への感情は閻瑜のいう「疑天」のみでは終わらなかつたのだ。では、物語後半の子路が「運命」を受け入れる姿は「敬天」といえるだろうか。いや、そうではない。子路は依然として「天」に公平性を感じはしない。不遇の「運命」を自分ましてや孔子にふさわしいものとは思わないうまま、その懷疑ゆえに「天」を恐れず自らの意志を貫く決意に至つたのである。子路は「天」が生んだ「運命」を呑み込み、不満を「使命」にまで昇華させたのだ。先の高橋英夫は、「弟子」に描かれたのは「人間関係の中で育まれる運命」であるとも述べているが、師弟の「運命」に変化は見られず、それを彼らが「育んでいる」とはいえないと論者は考える。「運命」を作るのはあくまでも「天」であり、むしろ「使命」の方こそ人間関係

が育んでいるのではないだろうか。子路が「使命」の目覚めに至ったのは、師や老人との交流があったからこそである。

自己研鑽を重ねていた孔子は、思いがけずに政治に関わることになった魯で長年の抱負を実現しつつあったのだが、孔子の存在が他国に危機感を抱かせ、国が乱れてしまった。魯では国が乱れても尽くせる限りの手段を尽くそうとしていた孔子だが、その後は国に道が無いときには退くべきだと考えるようになっていく。孔子は諸侯にとって「大き過ぎるもの」であり、恐ろしい存在である。彼によって自分の立場が危ぶまれるのではない、彼の政策によって不利益を被るのではないかと為政者が考えることのない、整った国でなければ、孔子を持て余してしまう。それを実感した孔子は、自分の能力を最大限に生かせる国を探し続ける。自己を高めていた孔子は、徐々に己の「外」に道を求めるようになっていったのである。

子路は善人が報われることを望み、それが叶わない「運命」を作り上げる「天」に不満を抱いていた。しかしながら、遍歴の中で人々の悪意に晒されてもいつも通りに振る舞う師の姿に、乱れた世において報われることにこだわらずに最善を尽くすことの崇高さを知った。さらに子路は、老人との出会いを通して「道無き世」でこそ道を説くことが大切だと考えるようになる。「外」に道を求めるのではなく、己の「内」に道を求めるようになっていったのである。

このように、孔子の初めての政治参与以降、孔子の意識は「内」から「外」に、子路の意識は「外」から「内」へと向かっていき、師弟はすれ違っていた。泄治の諫死についての評価が師弟間で食い違ったのは、孔子は自分と同じように国を退き整った「外」を探した方が泄治も能力を世のために生かしたはずだと考え、子路は泄治の「内」なる仁の精神を評価したか

らである。より多くの人を導くことができる場を探すべきとする孔子の考えは、子路には現在の中で身を捨てて自分の信念を貫くことをしない保身に感じられたのである。

遍歴の中で改めて気づく師の偉大さに感化されて、子路は成熟していく。子路は孔子の変わらぬ「人間の厚み」を追い続けるが、その裏側では孔子もまた変化し続けるし、彼の形式主義的な一面も残り続ける。近づいたかのように見えた師弟の距離は、そうかと思えばまた離れていく。不変の「肌合の相違」からなる溝は、二人の変化をもつても埋められないのである。

## 5 並び立つ師弟

孔子に感化されつつも師とは異なる独自の信念を貫く子路は、なぜ最期に冠を正すという師の教えを彷彿とさせる行動を取ったのだろうか。本章ではそれを考察し、彼の死にざまが浮かび上がらせる師弟の座標を読み取る。

孔子の推薦により衛の孔家に仕えた子路は、政変の中で主君を救おうと戦った。子路の死の場面を再度引用する。

子路は二人を相手に激しく斬り結ぶ。往年の勇者子路も、しかし、年には勝てぬ。次第に疲労が加はり、呼吸が乱れる。子路の旗色の悪いのを見た群集は、此の時漸く旗幟を明らかにした。罵声が子路に向つて飛び、無数の石や棒が子路の身体に当たった。敵の戟の尖端が頬を掠めた。纓(冠の紐)が断れて、冠が落ちかかる。左手でそれを支へようとした途端に、もう一人の敵の剣が肩先に喰ひ込む。血が迸り、

子路は倒れ、冠が落ちる。倒れながら、子路は手を伸ばして冠を拾ひ、正しく頭に着けて素速く纓を結んだ。敵の刃の下で、真赤に血を浴びた子路が、最期の力を絞つて絶叫する。

「見よ！ 君子は、冠を、正しうして、死ぬものぞぞ！」(十六) 四八一・四八二頁)

子路が孔子の門下に入る前から好んでいた長剣は、子路の生まれ持つての性質の象徴である。対して、かつては無頼の徒であることを示す垂冠を着けていた子路にとって、正しく身に着けた冠は孔子の教えの象徴である。

形式主義的な行為に対する態度からも窺えるように、他の弟子たちが形から入るところを、子路は精神が育つてから形に至るような弟子であった。冠を拾う行為は、一見、形から君子を装おうとする形式主義的なものに見える。けれども、子路は形から入るつもりで冠を正したわけではないだろう。自分の精神が君子足るものになったからこそ、冠を正したのである。泄治の諫死を巡って議論した際、孔子は「生命は道の為に捨てるとしても捨て時・捨て処がある」と述べた。政変の知らせを受けた子路の「愈々来たな」という思いは、予想通りに政変が起こったと同時に、自分の生命の「捨て時・捨て処」も到来したことを感じ取つてのものであるだろう。主君を諫めた泄治とは違い、子路は主君を救おうとした。泄治も子路も正義を貫いて命を落とすことになったが、二人の置かれた状況は異なる。子路は師の教えに背いて泄治のような死に方をするを選んだのではなく、師の言う生命の「捨て時・捨て処」が見つかったために死を覚悟したのである。最期の子路の状態こそが、長剣が象徴する生まれつきの気質と冠が象徴する孔子の教えの両方を融合した結果なのだ。異なる性質を持つがゆ

えに孔子と師弟の立場を超えた絆を育んでいた子路は、形式主義的な師の方法とは違う独自の方法で君子となった。「道無き世」に孔子と交差していた子路だが、死の間際に自分を君子と呼べるようになり、孔子と並び立つ存在となったのである。

孔子は子路の死を悼み、子路が醢しほ(塩漬け)にされたと聞けばその後一切塩漬けを食べなかった。各務美穂「中国の刑罰——醢刑を中心に——」(『中国言語文化研究』第二三号、二〇二三年一〇月、佛敎大学中国言語文化研究会)は、子路が醢にされた史実を例の一つとしながら死体を塩漬けにする醢刑について考察した論考である。各務によれば、醢刑とは、受刑者の肉を剥いで切り刻み食品に変化させることで、「身体を激しく損傷させるだけでなく、人間という立場を失わせる」刑罰である<sup>8)</sup>。さらに各務によると、醢を捨てさせる行為は食事上の礼を放棄することを意味するといふ。食品としての醢は、どの料理に何の醢を組み合わせるかの規則が礼として定められていた。孔子はその決まりを重んじており、合わせる醢が無ければ食品そのものも食べないほどであったことが『論語』に記録されているという。醢を処分させる行為は、孔子が食事の規則に従えなくなる結果をもたらすとした考察である。

「弟子」作中では醢刑に処されることが持つ意味は語られていない。それでも、「全身なま膾の如くに切り刻まれて、子路は死んだ」という一文において子路が食品の膾に喩えられていることから、彼の人としての尊厳が奪われたことが読み取れる。子路がこのような目に遭ったことは、孔子にとつて重い事実には違いない。道を説く自分たちが時代や人々から疎まれていなければ、子路はこのような死に方をせずに済んだのではないかと考えもするだろう。「大き過ぎるもの」である孔子と「道無き世」の相性の悪さ

は、子路の死にざまにまでも影響を及ぼしたのだ。醜を避ける行為は、愛弟子の死のみならず子路が人としての尊厳を奪われたことを思い出したくない孔子の心の表れである。各務の説に拠るならば、礼の遵守よりも子路への感情を優先させたともいえる。それほどまでに、孔子にとって子路はかけがえない存在だったのだ。物語は、礼よりも人としての感情を優先させる孔子の姿で幕を閉じた。

### おわりに

子路は、互いの間に溝があることを自覚しつつも師を敬愛し続ける弟子であった。「道無き世」において「大き過ぎる」孔子は陰謀を招き、自己と他者の両方に危険をもたらしてしまう。そのような時代において貴重な没利害性を持つからこそ孔子は子路を高く買い、その没利害性ゆえに子路は孔子の「大きさ」をまっすぐに慕うことができた。ところが、「道無き世」で政治に関わる中で「大き過ぎる」という性質のもたらす結果を実感した孔子は己の「外」の環境にも道を求め、「道無き世」で楽しみを全うする生き方を捨てて道を説く孔子に感化された子路は、「外」から報いを受けることを求めずに自己の「内」の道を極めるようになる。このようにして師弟の思想はすれ違っていた。

師を敬愛しながらも反発する子路のあり方は、異なる性質を持つがゆえに信頼し合う師弟関係の中で子路が成熟するために必要なものだった。反発の心があるからこそ師に疑問をぶつけ、敬愛の心があるからこそ師の応答に感化される。そうやって子路は「運命」の意味を理解した。反発の心があるからこそ師とは対照的な生き方に惹かれ、敬愛の心があるからこそ改めて師の偉大さに気づく。そうやって子路は「使命」に目覚めたのである。

る。彼にとつて孔子は、「肌合の相違」ゆえに己の性質を浮き彫りにし、視野を広げてくれる存在だった。孔子にとつてもまた、師を敬愛しつつも決して妄信することなく、常に自分なりの考えを持つことをやめない子路は、弟子であると同時にかけがえない他者だったのである。

子路は形式主義的な礼に機械的に従うことなく、自分の感情に従う人物であった。だからこそ、先に精神を育てる彼なりの筋道で君子となり、冠を正すに至った。孔子はそんな弟子の死を深く悲しみ、弟子を想う感情を礼よりも優先させた。後世に残された書物の記述を超えて、子路と孔子を自分なりに解釈しながら彼らの変化やすれ違いを語り、子貢の視点を通して肌は合わないが認め合う独特の関係性を読者に感じ取らせる語り手は、残された書物からは窺い知れない子路と孔子の間らしい一面を魅力的に描き出そうとしているのではないだろうか。近代人である語り手は、道を説くという彼らの正しさよりも、人との絆を育み、感情に従って生きる人間らしさの方に惹かれているのである。だからこそ、「老聖人は佇立瞑目すること暫し、やがて潸然として涙下った」というように、子路の死を知り感情的に嘆くときの孔子をこそ、「老聖人」と敬っているのである。

「山月記」と「牛人」における「運命」は不可解なものであった。一方、「弟子」に描かれた「運命」は理由がはっきりしている。それは時代との相性の悪さである。「道無き世」がもたらす不遇という「運命」は、そんな世にありながら時代に逆らつて道を説くことを選んだために降りかかったものである。そのことは子路も承知している。理由がわかっているならば対処法も簡単に見つかる。道を説くことをやめればいいのか。「山月記」と「牛人」における逃れられない「運命」とは違い、「弟子」におけるそれは回避可能なのだ。にも拘わらず、子路はそうはしない。「道無き世なれば

こそ、危険を冒しても尚道を説く必要があるのではないかと、あえて時代錯誤な生き方に「使命」を見出したからである。「運命」を作る「天」に不満を抱くことをやめ、不遇という「運命」の中に己の「使命」を見出したのだ。だから子路は、自ら望んで「運命」の渦中に留まったのである。

「運命」は李徴の認識に影響を及ぼし、叔孫豹の気力を奪った。李徴も叔孫豹も、「運命」によって一人の人間としての意志を踏みこじられ、抗うことを諦めたのだ。これはいわば「消極的な命なり」である。対して子路は、己の「運命」を認識したうえでそれを受け入れる「積極的な命なり」を実現した。困窮する「運命」の中でも生き方を曲げない孔子に感化され、「道無き世」においてどのような「運命」が訪れても道を実践し続けることを決意した子路は、「運命」に意志を左右されることがない。子路にとつて「運命」は「外」の環境に過ぎず、己の「内」を乱すものではないからである。「運命」は子路を変化させるほどの強制力を持っていない。論者は先に、「山月記」と「牛人」の二作品は「運命」を前にした人間の意志の無力さを描いていると述べた。「弟子」においてはその関係が全くの逆になっている。つまり「弟子」は、人間の意志を前にした「運命」の無力さを描いているのである。この物語で主軸となるのは「運命」ではなく人間だ。「弟子」は、「運命」が翻弄し得ない人間を描いた作品なのである。

先述したように、この物語が発表されたのは一九四三年、戦時下である。己の意志や感情に従いながら人間らしく、自分らしく生きる人々を鮮やかに描き出した本作は、そのような生き方が許されない世相に疑問を呈するとともに、「思考忌避性」といったやうなものへの「一種の防衛剤」（「章魚木の下で」前掲）としての役割を担っていたと論者は考える。己や世界と向き合い続ける子路の生きざまを通して、戦争という「運命」の中にあつて

も集団の軍国熱に浮かされることなかれ、自身の思考を放棄することなかれと警鐘を鳴らしていたのである。外国の古書を原典として描かれた時局性の薄い作品である「弟子」は、戦意高揚を目的とする当時の文壇の流れからは外れていた。時代の風潮に逆らうように「ほんもの」の文学を追求した中島の姿は、時代錯誤だとしても道を選べば子路の姿に通じるところがある。

「弟子」は、「運命」の中で己の意志を貫く子路の特異性に注目されてきた。そんな子路像を「中島文学における新たな展開の一つ」（郭玲玲論）とする見方もあるが、彼の生まれ持った性質だけでは、「運命」に不満を持つに留まり、「使命」に目覚めることはなかったのではないだろうか。李徴と叔孫豹とは違い、子路は一人で「運命」と対峙したわけではない。同じ不遇という「運命」の中を、孔子と共に生きていたのである。この物語において、「運命」にさえ左右されない子路の人物像を形成したのは人との交流であることはやはりやいまでもないだろう。子路が「使命」への目覚めという境地に至ることができたのは、同じ「運命」の渦中に、異なる肌合いを持ち、尚且つ敬愛と反発の両方を受け止めてくれる孔子がいたからである。中島文学の主人公として子路が独自の個性を持っているというよりは、他者との交流が人間に影響を及ぼすさまを描いた点で「弟子」という作品自体が「新たな展開の一つ」なのではないだろうか。孤独に「運命」に翻弄されてきた中島文学の主人公が、初めて同じ「運命」を共に生きる他者を得た作品、それが「弟子」なのである。強度のあるキャラクターを複数登場させ、彼らの交流を密に描くことによって人間の成熟や強さを照らし出した「弟子」は、人間が物語の主導権を「運命」から奪還した記念碑的作品である。

## 注

- (1) 「弟子」の原稿には、草稿と初出誌掲載時に使用された浄書原稿の二種類があり、本稿の底本である高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集』第一巻(二〇〇一年一〇月、筑摩書房)が採用したのは浄書原稿の方である。草稿のタイトルは「子路」であり、浄書原稿には「師弟」から「弟子」へと訂正された痕跡があることから、「子路」↓「師弟」↓「弟子」というタイトルの変遷が窺える。
- (2) 「古譚」とは四編の総題である。中島から四編の原稿を託されていた深田久弥の推薦により、「山月記」と「文字禍」が一九四二年二月に『文學界』(第九巻第二号、文藝春秋社)にて「古譚」の名のもとに発表された。「狐憑」と「木乃伊」は同年七月に単行本『光と風と夢』(筑摩書房)に収録されて初めて発表された。
- (3) 「弟子」執筆当時の作者の状況と時局については、鷺只雄「中島敦年譜」(高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集』別巻、二〇〇二年五月、筑摩書房)、神藤猛「危機における意思決定と「運用継続性」——高信頼性組織理論から見たミッドウエー海戦——」(『防衛学研究』第三七号、二〇〇七年一月、日本防衛学会)、山下真史「中島敦における「戦争と文学」」(『昭和文学研究』第六九巻、二〇一四年九月、昭和文学会)、小谷怜央「初期本土空襲から見る日本の防空体制における問題と限界——一九三八年の九州への中国軍機来襲を中心に——」(『文学研究論集』第五〇号、二〇一九年二月、明治大学大学院)などを参照した。
- (4) 「古俗」とは、一九四二年七月に『政界往来』(第一三巻第七号、政

界往来社)にて発表された「盈虚」と「牛人」の総題である。

- (5) 橋本正志「中島敦「山月記」論——唐代伝奇「人虎伝」と作品の人物・舞台設定を視座として——」(『論究日本文学』第九六巻、二〇一二年五月、立命館大学日本文学会)は、原典である「人虎伝」では李徴は自身の変身を放火殺人の報いによるものと理解しており、「山月記」はその筋立ての書き換えによって「人虎伝」を換骨奪胎した作品であると述べている。「人虎伝」においても李徴は変身の理由を己自身に見出しているが、「山月記」の李徴が導き出す「運命」の理由は原典の因果応報と比較すると不明瞭化されており、そのことは李徴の内省から説得力を奪っていると言者は考える。

- (6) 蓼沼正美「山月記」論——自己劇化としての語り——」(『国語国文学研究』第八七号、一九九〇年一二月、北海道大学国語国文学会)は、始めはわからないと述べていたはずの変身の理由を李徴が己と結び付けていくのは、語ることで「自分がどれだけ(悲)劇的な運命を背負わされてしまったか」を自覚したからであると分析した。李徴がそこに「存在証明」を見出して自己を演出した結果として、彼が語るほどに虎になった理由の「(悲)劇性」は増幅していったのだという論考である。蓼沼の議論を引き受けた千田洋幸「自己物語の戦略——「山月記」を読み直す——」(『現代文学史研究』第二九巻、二〇一八年一二月、現代文学史研究所)もまた、李徴の語る行為に着目している。その語りは、理由が「判らぬ」からこそ「運命」という「あいまいな定義」を与えておくしかなかったはずの虎への変身を「正当化」し必然化する言葉」を模索するものであると、千田は述べている。李徴の語りは同時に、弱さを認める「人間的」な姿を見せることによって聴き

手の同情と同一化を誘い、自己承認の欲求を満たすものでもあったと論述されている。蓼沼も千田も、語る行為が李徴の内に「運命」の理由を生じさせていると捉えているが、論者はさらに、李徴の語りの中で生じた自己認識の変化に焦点を当てた。

(7)「牛人」は、原典である「春秋左氏伝」との違いについて考察が重ねられてきた作品である。西谷博之「中島敦『盈虚』と『牛人』の世界」(『比較文学』第二〇巻、一九七七年一月、日本比較文学会)は、「春秋左氏伝」では自らが選んだ人物を後継ぎにして叔孫家を裏で操るといふ豎牛の目的が描かれているのに対し、「牛人」では作者が「豎牛の目的がどこにあるか最後まで明らかにしない」と指摘した。畢復芸「世界のきびしい悪意」の真相——中島敦の「古俗」——(『Comparatio』第二巻、一九九八年四月、九州大学大学院比較社会文化研究科比較文化研究会)は、「春秋左氏伝」では仁や義に篤い家来を選ぶことが不得意であるといった叔孫豹の人物像が描かれているのに対し、「牛人」では作者が「原典にある叔孫の性格についての描写を特に書き換えることもなく、ほとんど削除してしまった」と指摘した。

(8)各務は、非難すべき人の肉を食べることで気持ちを晴らす文化が存在していた春秋戦国時代において、人間を食品に変化させる醜刑は死刑の中でも復讐の色が強い刑罰であると述べている。そのうえで、事実上の子路が醜刑に処されたのは、彼の行動をきっかけに孔子一行やその他の人々が政変の中心人物である蒯聵かいがいに反発することのないように、最初に反発してきた子路に最も残酷な刑罰を科すことで人々に恐怖を与えて反乱の抑止力とする必要があったためであると考察している。

※「弟子」「山月記」「牛人」の本文引用は高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集』第一巻(二〇〇一年一月、筑摩書房)に拠る。「章魚木たこのきの下で」は同全集の第二巻(二〇〇一年二月)に拠る。傍点は全て原文に従った。ルビの( )の有無も同様である。これは引用元の編者が難読の漢字等に補ったルビを原文にあるルビと区別するために付されたものである。原則として旧漢字は新漢字に改めたが、歴史的仮名遣いは原文に従っている。ルビは適宜取捨した。

#### 付記

本稿は、二〇二四年度北海道教育大学札幌校に提出した卒業論文「敬愛しながら反発し、反発しながら敬愛する——中島敦「弟子」論——」をもとに、加筆修正したものである。

#### 参考文献一覧

- ・高木卓「作用力の乏しさ——文芸時評(抄)」『新潮』第四〇巻第三号、一九四三年三月、新潮社
- ・佐々木充「李陵」と「弟子」——中島敦・中国古典取材作品研究(一)——(『帯広大谷短期大学紀要』第一巻、一九六一年一月、帯広大谷短期大学)
- ・高橋英夫「中島敦論——運命と人間——」『海』第一巻第六号、一九六九年一月、中央公論社
- ・木村一信「山月記」論(『日本文学』第二四巻第四号、一九七五年四月、日本文学協会)

- ・佐々木充「弟子」——おのれを支えるもの——」(同著『中島敦の文学』一九七六年六月、桜楓社)
- ・佐々木充「李陵」——運命への問い——」(同著『中島敦の文学』前掲)
- ・西谷博之「中島敦「盈虚」と「牛人」の世界」『比較文学』第二〇巻、一九七七年一二月、日本比較文学会)
- ・勝又浩「作品と鑑賞——『山月記』鑑賞——」(同著『Spirit 中島敦』作家と作品)一九八四年七月、有精堂)
- ・勝又浩「中島敦 代表作解題——『弟子』——」(同著『Spirit 中島敦』作家と作品)前掲)
- ・木村一信「文学史的定位の基点——『章魚木の下で』を視座として——」(同著『中島敦論』一九八六年二月、双文社)
- ・木村一信「弟子」論——「己が性情」への指向——」(同著『中島敦論』前掲)
- ・木村一信「李陵」論——中島文学の達成——」(同著『中島敦論』前掲)
- ・蓼沼正美「山月記」論——自己劇化としての語り——」『国語国文研究』第八七号、一九九〇年一二月、北海道大学国語国文学会)
- ・秋元誠「中島敦「弟子」考——その劇的なるもの——」『富山工業高等専門学校紀要』第二五巻、一九九一年三月、富山高等専門学校)
- ・藤村猛「中島敦論ノート(五)——「南洋行」から「弟子」へ——」『国語国文論集』第二二号、一九九二年二月、安田女子大学日本文学会)
- ・藤村猛「中島敦論ノート(六)」『国語国文論集』第二三号、一九九三年一月、安田女子大学日本文学会)
- ・吉永智子「中島敦論」『国文研究』第四三号、一九九八年三月、熊本女子大学国文談話会)
- ・畢復芸「世界のきびしい悪意」の真相——中島敦の「古俗」——」『Comparatio』第二巻、一九九八年四月、九州大学大学院比較社会文化研究科比較文化研究会)
- ・勝又浩「語注」(高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集』第一巻、二〇〇一年一〇月、筑摩書房)
- ・勝又浩・川村湊・鷺只雄「解題」(高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集』第一巻、前掲)
- ・勝又浩・鷺只雄「解題」(高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集』第二巻、二〇〇一年一二月、筑摩書房)
- ・鷺只雄「中島敦年譜」(高橋英夫・勝又浩・鷺只雄・川村湊編『中島敦全集』別巻、二〇〇二年五月、筑摩書房)
- ・村田秀明「君子は、冠を、正しうして」の出自——『東洋思想叢書2 春秋』——」(同著『中島敦「弟子」の創造』二〇〇二年一〇月、明治書院)
- ・西原大輔「中島敦「李陵」「弟子」と南洋植民地」『比較文学研究』第八六号、二〇〇五年一月、東大比較文學會)
- ・奴田原論「存在の透明度——中島敦「弟子」考——」『昭和文学研究』第五五巻、二〇〇七年九月、昭和文学会)
- ・神藤猛「危機における意思決定と「運用継続性」——高信頼性組織理論から見たミッドウェー海戦——」『防衛学研究』第三七号、二〇〇七年一月、日本防衛学会)
- ・松村良「中島敦「弟子」論——師弟愛について——」『学習院大学国語国文学会誌』第五一号、二〇〇八年三月、学習院大学文学部国語国文学会)
- ・荒木雪葉「中島敦「牛人」の天あるいは天命観」『地域健康文化学論輯』

- 第一巻、二〇〇九年九月、地域健康文化学会)
- ・閻瑜「中島敦文学における「天」——疑天から敬天へ——」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第二二号、二〇一一年三月、大妻女子大学大学院文学研究科)
- ・橋本正志「中島敦「山月記」論——唐代伝奇「人虎伝」と作品の人物・舞台設定を視座として——」(『論究日本文学』第九六巻、二〇一二年五月、立命館大学日本文学会)
- ・山下真史「中島敦における「戦争と文学」」(『昭和文学研究』第六九巻、二〇一四年九月、昭和文学会)
- ・郭玲玲「中島敦『弟子』論——己を堅持する子路像の成立をめぐる——」(『東アジア研究』第一三三号、二〇一五年三月、山口大学大学院東アジア研究科)
- ・千田洋幸「自己物語の戦略——「山月記」を読み直す——」(『現代文学史研究』第二九集、二〇一八年二月、現代文学史研究所)
- ・小谷怜央「初期本土空襲から見る日本の防空体制における問題と限界——一九三八年の九州への中国軍機来襲を中心に——」(『文学研究論集』第五〇号、二〇一九年二月、明治大学大学院)
- ・橋本正志「中島敦「章魚木の下で」論——島木健作『満洲紀行』の影響を中心に——」(『別府大学紀要』第六一号、二〇二〇年二月、別府大学)
- ・各務美穂「中国の刑罰——醜刑を中心に——」(『中国言語文化研究』第二二三号、二〇二三年一〇月、佛教大学中国言語文化研究会)
- ・石井要「虎であるとはどのようなことか——「山月記」論——」(同著『中島敦 意識のゆらぎから複数の世界へ』二〇二四年五月、ひつじ書房)